

「戦時下における児童文化」について(その二一):  
「少国民新聞」(東日版)における読者投稿作品の位相  
と展開(九)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊木, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5865">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5865</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 「戦時下における児童文化」について（その二一）

——「少国民新聞」（東日版）における読者投稿作品の位相と展開（九）——

熊 木 哲

はじめに

「少国民新聞」（東日版・東京日日新聞社発行）の昭和十七年に掲載された「図画」を四半期毎に検討する。作者については、在籍校名・在学年・性別を記すとどめた。在学年次のうち「高一」「高二」は高等科一年、二年を示す。

### 一 昭和十七年の「図画」作品の展開

昭和十七年の検討対象は、一月一日（木・第一六四二号）から十二月三十日（水・第一九五一号）までの、毎週月曜日の休刊日を除いた三二一日分であるが、毎月曜以外の休刊日が二日（四月四日・土、九月二十五日・金）、国会図書館蔵「少国民新聞」は、二月二十日（金・第一六八五号）、五月七日（木・第一七四九号）、五月三十一日（日・第一七七〇号）、

「戦時下における児童文化」について（その二一）

十二月十九日（土・第一九四二号）の四日分のマイクロフィルムが「欠」であり、検討対象は三〇五日分。

昭和十七年、「図画」の掲載数は九三作品。前年の十六年の掲載数が三〇六作品であったから、大幅な掲載減となった。内訳は、第一四半期が二七作品。（二六年は五一作品）

第二四半期が一九作品。（同右 九二作品）

第三四半期が二五作品。（同右 八六作品）

第四四半期が二二作品。（同右 七七作品）

すべての四半期において減少したことになる。

十七年一年間に、複数の「図画」作品が掲載された児童は、二作品が六名、後は一作品ずつの掲載であった。

十七年で最も多数の作品が掲載された国民学校は、八作品が掲載された埼玉県羽生校。複数が掲載された児童はなく、八名すべてが二年生であった。掲載時期も、一月末から二月初めに集中しており、学年での取り組みであったことを推測させる。

七作品が掲載されたのが、山梨県穂積校。七名の作品が一作品ずつ掲載され、一年生が二作品、二年生が一作品、五年生が一作品、高等科一年生が一作品、高等科二年生が二作品掲載された。掲載時期は、六作品が九月、一作品が十月であり、学校での取り組みを推測させるものではなく、それぞれの児童による投稿であったと考えられる。

四作品が掲載されたのが、茨城県聾啞校と東京市京橋区泰明校。

茨城県聾啞校の場合は、一年生が一作品、三年生三人で三作品の掲載。掲載は、四作品とも四月であるが、学校での取り組みを推測させるものはない。

京橋区泰明校の場合は、四作品中三作品が「大東亜戦争一周年記念」の作品であり、三年生一人で二作品が掲載され、五年生二名で二作品が掲載されていた。

三作品が掲載されたのが、東京市神田区神龍校。四年生一名、六年生二名の作品であった。三作品とも映画「ハワイ・マレー沖海戦」を見て描かれた作品であった。

以下、四半期毎に検討する。

## 二 昭和十七年第一四半期における「図画」

昭和十七年第一四半期（一月～三月）に掲載された「図画」は、次の二七作品。なお、一月三十一日から掲載された一八作品には、画題が付記された。画題は「」で記した。検討のために、便宜的に、掲載日付順の番号を付す。

- 1 双翼の戦闘機に乗り込む兵士（静岡県内浦校高二男子、一月二十八日・水、第一六六五号）
- 2 軍港に集結している艦船（東京市中野区啓明校四年女子、同右）
- 3 戦艦を爆撃している双翼の戦闘機二機（長野県上郷校五年男子、同右）
- 4 椰子の生えている島で日本軍の飛来に日の丸を手にして喜ぶ人々（埼玉県羽生校二年女子、同右）
- 5 同右（埼玉県羽生校二年男子、一月二十九日・木、第一六六六号）
- 6 編隊で飛行する戦闘機（東京市小石川区駕籠町校三年男子、同右）
- 7 艦船を爆撃する戦闘機（神奈川県平塚第一校二年男子、同右）
- 8 空中戦の戦闘機群（埼玉県羽生校二年男子、一月三十日・金、第一六六七号）
- 9 銃を持って走る兵士（山形県長井校四年女子、同右）
- 10 戦艦の上空を飛ぶ飛行機群（東京市小石川区駕籠町校三年男子、同右）

- 11 「巨弾の雨」爆撃されている椰子の生えている島（埼玉県羽生校二年男子、一月三十一日・土、第一六六八号）
- 12 「いざ空襲に」空襲に飛び立つ飛行機（秋田県矢立校二年男子、同右）
- 13 「日本バンザイ」日の丸を挙げて喜ぶ人々（埼玉県羽生校二年女子、二月一日・日、第一六六九号）
- 14 「見事に命中」爆撃されて黒煙を上げる戦艦（静岡県静岡市第一校三年男子、同右）
- 15 「水柱の林」爆撃で上がっている水柱（埼玉県羽生校二年女子、二月三日・火、第一六七〇号）
- 16 「沈む敵艦」爆撃され沈もうとしている戦艦（茨城県水戸市浜田校一年女子、二月四日・水、第一六七一号）
- 17 「勲をまつぞ」出発する飛行機を見送る兵士たち（埼玉県羽生校二年女子、同右）
- 18 「感激の入城」陥落させた街に入城する日本軍（千葉県八栄校四年男子、二月五日・木、第一六七二号）
- 19 「万歳万歳」椰子の生えている島で戦艦に日の丸を振る人々（埼玉県羽生校二年男子、同右）
- 20 「敵陣近し」泳いで進む兵隊（山形県長井校四年女子、二月六日・金、第一六七三号）
- 21 「逃がすものか」爆撃され煙をあげる戦艦（東京市八王子市第七校高一女子、同右）
- 22 「必中弾」爆撃される戦艦と爆撃する飛行機（静岡県御殿場校高二男子、同右）
- 23 「見事に命中」艦船を爆撃する飛行機（埼玉県東野第一校高二女子、二月八日・日、第一六七五号）
- 24 「忽ち撃沈」飛行機に爆撃され沈没していく艦船（山形県沖郷校三年男子、同右）
- 25 「飛行場粉砕」日の丸をつけた飛行機群が爆撃（秋田県醜醐校高二男子、同右）
- 26 「思ひ知つたか」艦船を爆撃する飛行機群（秋田県本荘校四年男子、二月十日・火、第一六七六号）
- 27 「燃える敵機」空中戦で敵機を撃ち落とす戦闘機（栃木県吹上校高二男子、同右）

以上、十七年第一四半期に掲載された二七作品であったが、直前期の十六年第四四半期の掲載数が七七作品であり、掲

掲載数は激減した。

掲載された二七作品において、絵柄に「戦時下色」が見える作品は二七作品。すなわち、掲載された「図画」のすべての絵柄が「戦時下色」をまとうていた。直前の一六年第四四半期では、七七作品中、「戦時下色」が見える絵柄は三作品であり、掲載率は約三・九％にすぎなかった。

つまり、十七年第一四半期では、「図画」の掲載数が著しく減少したにもかかわらず、「戦時下色」の絵柄の掲載率は飛躍的に増大したことになる。

「図画」の第一四半期における掲載は一月二十八日（水・第一六六五号）から始まったが、その事情は、同日の第三面の囲み記事「大東亜戦の図画」に明らかである。

米英を散々に叩きのめしてゐる皇軍の、大活躍ぶりを、真心の絵筆で描いた皇軍慰問の自由画、「ハワイ海戦」「マレー沖海戦」「香港陥落」の優秀作品は、いよ／＼今日から紙上を飾ります。陸に、空に、武勲を輝かす皇軍の勇ましい姿が、ほんたうによく現れてゐます。さあ、兵隊さんへ心からの「ありがとう」を捧げながら、楽しみに御覧ください。

「大東亜戦の図画」は、十七年の一月一日（木・第一六四二号、第七面）の紙上で募集された。

#### 皇軍慰問 感激の図画募集

題材は「ハワイ海戦」や「マレー沖海戦」「香港陥落」

一度大東亜戦争が始ると、忽ちにして皇軍の大戦果が発表され、全世界を驚かせてゐます。少国民新聞では、この感激をあらはした図画を、皆さんから募集します。場面は「ハワイ海戦」「マレー沖海戦」「香港陥落」の三つの中から選んでください。作品は全部、前線の兵隊さんへの慰問に贈りますから、腕に撚りをかけて、皆さんのまぶたに浮か

ぶ陸、海、空の皇軍勇士奮戦の姿を、勇ましく描いて下さい。

締切りは、一月十五日で、「到着順によいものから順次紙上に発表」するとした。

この募集への応募状況を報じた記事が一月十八日（日・第一六五七号）に掲載された。

#### 少國民新聞募集 皇軍慰問 大東亜戦の自由画

元旦付の紙上に発表の「ハワイ海戦」「マレー沖海戦」「香港陥落」を題材として「皇軍慰問の図画募集」は、ぞくぞくあがる無敵皇軍の大戦果に、感激の胸を高鳴らせてゐる皆さんの間に、忽ち大人気をまきおこしました。そして元旦の夕刻には、早くも十数点の作品がよせられ、あまりの早さに編集部の先生はびつくりしました。その後、毎日ひきつゝいて皆さんの力作が届き、締切の十五日夕刻までには、力作二千二十三枚の多きにのほりました。樺太や北海道からも沢山応募されました。

二週間ほどの募集期間に、二千枚を越す作品の応募があり、そのなかには、図画の担任教師が「五十余人の皆さん絵をまとめて」送ってきたり、女子児童からの応募作品が多かったことも「嬉しいことの一つ」だったと記した。

「ハワイ海戦」「マレー沖海戦」「香港陥落」は、いうまでもなく、前年十二月八日に開戦となった「大東亜戦争」の戦闘であり、連日報道された戦果に児童たちも興奮し、また、戦果に感激した結果か、「女の皆さんからの応募の多かつたこと」は、予想外のことだったということだ。

第一四半期に掲載された二七作品は、「皇軍慰問」の自由画募集に応募した作品の中からの掲載であり、一月二十八日から二月十日まで集中しての掲載であり、一月二十八日以前及び二月十日以降の掲載はなかった。

二七作品のうち、複数が掲載された在籍校は、埼玉県羽生校が八名で八作品。東京市小石川区駕籠町校と山形県長井校が、それぞれ一名で二作品。

埼玉県羽生校の八作品は、すべて二年生の作品。一校で八作品が掲載されたのは、十七年度の最多となったが、第一四半期だけの掲載であった。図画の担任教師が「五十余人の皆さん絵をまとめて」送ってきたりしたが、羽生校もそうした一つであったか。

羽生校八名の児童による八作品の絵柄は、画題に「日本バンザイ」と付けられた日の丸を挙げている島民を描いた作品をはじめ、画題が付記されていない二作品の絵柄は、椰子の繁る島で飛んでいる飛行機に日の丸を振る人々であり、画題「巨弾の雨」の作品では椰子の生えている島が爆撃されている絵柄である。

画題「万歳万歳」でも、椰子の生えている島に入港してきた戦艦を日の丸で迎える人々が描かれ、「椰子」「日の丸」が描きこまれている作品は、八作品中五作品におよび、南洋をモチーフとした「マレー沖海戦」が画題であったか。

### 三 昭和十七年第二四半期における「図画」

昭和十七年第二四半期（四月～六月）に掲載された「図画」は、次の一九作品。検討のために、便宜的に、第一四半期を引き継いで、掲載日付順の番号を付す。

- 28 立木のある家屋（茨城県聾哑校三年男子、四月十一日・土、第一七二七号）
- 29 爆撃する飛行機とあがる水柱（北海道江別第二校四年男子、四月十二日・日、第一七二八号）
- 30 爆弾を投下する飛行機群（青森県堀越校四年男子、四月十四日・火、第一七二九号）



- 31 日の丸をたてた戦車（茨城県園部校三年男子、四月十五日・水、第一七三〇号）
- 32 戦艦の二門の砲塔（北海道柏校四年男子、四月十七日・金、第一七三二号）
- 33 拭き掃除をしている母と男児（群馬県桐生市東校四年女子、四月十七日・金、第一七三二号）
- 34 トラックに乗っている多数の兵士（茨城県聾哑校一年男子、四月十九日・日、第一七三四号）
- 35 大縄跳びをしている女児たち（茨城県聾哑校三年女子、四月二十四日・金、第一七三八号）
- 36 電信柱が立っている路地（茨城県聾哑校三年男子、四月二十六日・日、第一七四〇号）
- 37 両脇に絞ったカーテンと飲み物と本がある部屋（北海道森校四年女子、同右）
- 38 一人の飛行兵（神奈川県川崎市住吉校五年男子、四月十二日・日、第一七二八号）
- 39 戦艦の砲塔と水兵（北海道江別第二校四年男子、五月五日・火、第一七四七号）
- 40 戦車と兵士（埼玉県北泉校四年男子、六月三日・水、第一七七二号）
- 41 壺（一つ）（宮城県登米校六年女子、六月五日・金、第一七七四号）
- 42 空に伸びる数本の探照灯の光線（青森県石川校六年男子、六月六日・土、第一七七五号）
- 43 カニとエビ（新潟県鶴川校高二男子、六月九日・火、第一七七七号）
- 44 遠景に山、中景に林と高圧線鉄塔、近景に畑（埼玉県三芳校四年男子、同右）
- 45 瓶と皿（茨城県大野校六年女子、六月二十四日・水、第一七九〇号）
- 46 鉢植えの花（北海道月寒校高二男子、同右）

以上、第二四半期一九作品のうち、絵柄に「戦時下色」が描かれたのは、28、29、30、31、32、34、38、39、40、42の九作品。掲載率は、四七・四％。直前期の第一四半期は、「皇軍慰問」の自由画募集に応募した作品のみの掲載であったか

ら、「戦時下色」の絵柄の作品は一〇〇%の掲載率。

第二四半期での掲載率の減少は、ある意味で平常であったといえようが、それにしても、掲載数のほぼ半数、約五割の掲載であり、少なくない掲載率であった。

「29爆撃する飛行機とあがる水柱」と「39戦艦の砲塔と水兵」の作者は、同じ児童なので、八名による九作品であった。第二四半期の絵柄に「戦時下色」のある作品を描いた児童八名は、すべて男子児童。

第一四半期に掲載された「大東亜戦」二七作品のうち、九作品（八名）の作者が女子児童であった。「大東亜戦の自由画」（一月十八日・日・第一六五七号）において、女子児童からの応募作品が多かったことも「嬉しいことの一つ」だったと記していたが、女子児童は、一般的に戦争風景を絵柄に選ばないと考えられていたということになる。第二四半期に「戦時下色」の絵柄がないことは、自発的な絵柄としては、「戦時下色」の絵柄に、女子児童はあまり積極的ではなかったということになるか。

九作品の絵柄は、攻撃している様子を描いた作品が29と30の二点。ほかの七点は、戦闘中の絵柄ではなく、第一四半期とは傾向が異なっている。これは、第一四半期が、戦闘をモチーフとする募集であったことに理由があり、新聞社が募集したのではない、自発的な作品に選ばれた絵柄である「31日の丸をたてた戦車」、「34トラックに乗っている多数の兵士」、「40戦車と兵士」は、児童が眼にした絵柄とも推測される。

第二四半期に掲載された一九作品のうち、「戦時下色」を絵柄とする九作品以外の一〇作品の絵柄は、人物画二作品、風景画四作品、静物画四作品。

人物画は、「33拭き掃除をしている母と男児」と「35大縄跳びをしている女児たち」。

33は、作者が女子児童であるから、男児は、作者の弟か。家族の風景を描いたということ。35の大縄跳びは、作者の女子児童が校庭で見た光景ということであろう。両作品とも、作者の日常風景だ。

風景画は、「28 立木のある家屋」、「36 電信柱が立っている路地」、「37 両脇に絞ったカーテンと飲み物と本がある部屋」、「44 遠景に山、中景に林と高圧線鉄塔、近景に畑」の四作品。児童が、日常で目にしている風景のスケッチということ。

静物画は、「41 壺（一つ）」、「43 カニとエビ」、「45 瓶と皿」、「46 鉢植えの花」の四作品。41、45、46 は、静物画の絵柄としては、いわば定番ともいえるオブジェだが、「カニとエビ」は、作者が新潟県ゆえであろうか。

第二四半期に複数の作品が掲載されたのは、茨城県聾啞校で、四作品。一年生一作品、三年生三作品が、この第二四半期の四月にだけ掲載された。そのうちで、最も早く掲載されたのは四月十一日紙面であり、新学期開始後の授業での取り組みとは考えにくい。一方、四月十九日（日）紙面には「一年生」の作品が掲載されており、入学前から取り組み、入学後に投稿したと考えることにも無理がある。入学式が四月六日の月曜日と仮定して、紙面印刷の都合からは、東京に十七日には到着する必要がある。ならば、現代の感覚で考えると、茨城県での投函は遅くとも十五日であろう。ということ。は、入学式翌日の七日（火）から十四日（火）の間の「図画」の時間に描かなければならないことになる。実質、新入生の入学後の一週間であり、相当、忙しいことになろう。つまり、四月に集中して掲載された事情は推測できないということである。

#### 四 昭和十七年第三四半期における「図画」

昭和十七年第三四半期（七月～九月）に掲載された「図画」は、次の二五作品。画題が付されている場合、「」で記した。検討のために、便宜的に、第二四半期を引き継いで、掲載日付順の番号を付す。

47 「軍艦旗」戦艦に掲げられた軍艦旗（愛知県名古屋市那古野校一年男子、七月十九日・日、第一八二二号）

- 48 「漁村」網を引く漁師（岡山県岡山市南方校三年女子、同右）
- 49 「造船所」船首を建造中の造船所（同右校四年男子、同右）
- 50 「南国の海」椰子の生えている間に立って日の丸を掲げる人々（南洋庁サイパン公学校二年アグステン、同右）
- 51 「積み出し」港で積み込み中の貨物船（山口県防府市華浦校五年女子、七月二十二日・水、第一八一四号）
- 52 「軍艦と落下傘部隊」軍艦と飛行機から飛び降りる落下傘部隊（愛知県名古屋市那古野校四年男子、同右）
- 53 列車での出征を見送る人々（島根県美濃郡小野村戸田校高二男子、七月二十九日・水、第一八二〇号）
- 54 戦艦と空に飛行機二機（埼玉県所沢校三年男子、同右）
- 55 荷車を押す子供たち（静岡県庵原郡富士川校一年男子、同右）
- 56 傷痍軍人に挨拶する子供たち（福井県丹生郡吉川村校二年女子、同右）
- 57 戦艦と上空に戦闘機（東京市豊島区高田第五校二年男子、九月一日・火、第一八四九号）
- 58 傘をさす二人の児童（山梨県穂積校一年女子、同右）
- 59 鉢植えの花（北海道鹿追校四年女子、九月二日・水、第一八五〇号）
- 60 飛行機と交戦している戦艦（山梨県穂積校二年男子、同右）
- 61 戦闘機と交戦中の艦船（北海道茂尻校四年男子、九月三日・木、第一八五一号）
- 62 塀に囲まれ立木のある大きな家屋（山梨県三村校六年男子、同右）
- 63 戦闘機と交戦中の戦艦（北海道鹿追校二年男子、九月四日・金、第一八五二号）
- 64 リボンを巻いた帽子（千葉県銚子市中央校六年女子、同右）
- 65 立木のある家屋（山形県相模校六年男子、九月六日・日、第一八五四号）
- 66 開いた本と閉じた本（山梨県穂積校高二女子、同右）

- 67 皿にのせた果物（千葉県野田校四年女子、九月九日・水、第一八五六号）  
 68 田で働く人々（山梨県穂積校高二男子、同右）  
 69 立木のある家屋（群馬県黒保根校四年男子、九月十一日・金、第一八五八号）  
 70 戦艦上空を飛ぶ戦闘機（山梨県穂積校一年男子、同右）  
 71 立てかけられたコウモリ傘（同右校五年男子、九月十三日・日、第一八六〇号）

以上、第三四半期二五作品のうち、絵柄に「戦時下色」が描かれたのは、47、52、53、54、55、56、57、60、61、63、70の一一作品。掲載率は、四四％。第二四半期が四七・四％であったから、若干、減少したことになる。

掲載された二五作品のうち、「少國民新聞」が募集した「海と艦船」の図画作品の入選六作品が七月に掲載された。この募集は、三月七日（土、第一六九八号四面）に、次のように、募集広告された。

## 第二回「海の記念日」を前に

### 船と海の世界募集

少國民新聞が協力して皆さんから

去年から七月二十日を「海の記念日」と定めて、日本全国民に海の知識をひろめました。少國民新聞では、日本海運報国団に後援して、皆さんから「海の世界」を募集しましたが、続いて今回第二回の「少國民海の世界」を募ります。今度は日本海運報国団、日本海事振興会、日本少國民文化協会と少國民新聞が主催し、海軍省、文部省、逓信省、情報局が後援です。作品は図画と綴方で、全国の国民学校の皆さんから募ります。

この募集の締め切りは五月三十一日、審査結果が発表されたのは、七月十九日（日）。以下は、同日二面に掲載された結果発表。

「海ゆく日本」の心意気に

あふれた傑作揃ひ

「海と艦船」の作品入選さまる

黒潮おどる太平洋、海水わきたつインド洋に、さては氷の流れる北海に、わが無敵海軍は堂々の進軍をつづけてゐます。この大東亜戦争下に初めて迎へる明日の「海の記念日」を前にして、少國民新聞が全国の皆さんから募集した「海と艦船」の作品の、当選発表をすることになりました。

図画の応募作品は、「七千三百四十三点」。審査の結果、海軍大臣賞に「47軍艦旗」、文部大臣賞に「48漁村」、通信大臣賞に「49造船所」、情報局総裁賞に「50南国の海」が選ばれ、「二等」に四名が選ばれ、そのうち、「51積出し」と「52軍艦と落下傘部隊」の二作品が掲載された。

各大臣賞と二等の受賞作品のうち、「戦時下色」が描かれた絵柄は、47と52の二作品のみであり、他の受賞作品には、戦時下ゆえの絵柄が扱われなかった。

情報局総裁賞を受賞したのは、「南洋庁サイパン公学校補習科二年アグステン・セイリス」。氏名からは、サイパンの現地住民であったか。

また、国内の一九の府県と中国・関東州、南洋庁から「三等」に百名が選ばれ氏名が掲載され、「南洋庁」からは十五名、「関東州」から三名が入賞した。いわゆる内地、外地から七千三百余の応募があったとのことであるが、主催した各団

体の働きかけなどが推測されるところである。

絵柄に「戦時下色」のある作品のうち、53、54、55、56の四作品は、「少国民新聞」が募集した軍人援護ポスターの入選作品。軍人援護ポスターの募集広告は、五月二十二日（金・第一七六二号）第二面に掲載された。

#### 皆さんから募集 軍人援護ポスター

支那事変に続く大東亜戦争の大戦果は、全く兵隊さんのおかげであります。私たちは忠霊に深い感謝を捧げると同時に、その出征軍人の家族、傷痍の勇士を出来るだけお助けしなければなりません。そこでその心持をあらはしたポスターを、皆さんから募集することになりました。

ポスターの内容は、「忠霊の家、出征軍人の家族、傷痍軍人をお助けする気持のあらはれたもので、必ず自作その他の適当な標語を書込むこと。遺族章や軍人傷痍記章をつける場合は右胸です。なほ傷痍の勇士を描く場合は、白衣を使つてはいけません。和服、洋服、仕事着など、いづれでもよろしい」と「規則」に記され、「なるべく学校でまとめて、校長先生から送つていただくこと」とされた。

締切りは、六月三十日であったが、ほぼ一か月の募集期間に、全国から「十五万七千九点」の応募があった（七月二十九日「軍人援護ポスター」審査結果発表）。

特選は四名。文部大臣賞は「53列車での出征を見送る人々」の絵柄で、標語は「征くか 頼むぞ、後は引受た」。

軍人保護院総裁賞は、「54戦艦と空に飛行機二機」の絵柄で、「兵隊さんありがとう」の標語。  
 軍人援護会長賞は、「55荷車を押す子供たち」の絵柄に、「ボクラモヒトヤク ユウシノテアシ」の標語。  
 少国民新聞賞は、「56傷痍軍人に挨拶する子供たち」の絵柄で、「ヨジサンアリガタウ コンドハボクラダ」の標語。

応募作品には、絵柄に「必ず自作その他の適当な標語を書き込むこと」と応募条件が付されたが、「適当な標語」として、「少國民新聞」六月十九日（金・第一七八六号）二面に、「軍事保護院で選定」の標語として一八が掲載された。入選した四作品の標語は、学年によってカタカナ表記となったものの、この一八の標語の中から採られていた。

「海と艦船」「軍人援護ポスター」の作品は、「少國民新聞」の募集への応募であり、絵柄の選択は、募集趣旨に合うものであり、いわば他律的な絵柄といえようが、児童自らによる、いわば自律的な絵柄選択による戦時下色を絵柄とする作品は、「57戦艦と上空に戦闘機」、「60飛行機と交戦している戦艦」、「61戦闘機と交戦中の艦船」、「63戦闘機と交戦中の戦艦」、「70戦艦上空を飛ぶ戦闘機」など、その何れもが戦闘風景か、戦闘状況を迎える絵柄ということができる。

言うまでもなく、児童たちは、こうした戦闘場面に直接出会い、目にしたことではない。絵柄は、想像ということになるが、その切っ掛けは、随時、「少國民新聞」に掲載された戦地からの報道写真やニュース映画での見聞ということであったと推測できる。

第三四半期に掲載された二五作品のうち、「戦時下色」を絵柄とする一作品と「海と艦船」に入選した四作品以外の一〇作品の絵柄は、人物画二作品、風景画三作品、静物画五作品。

人物画は、「58傘をさす二人の児童」と「68田で働く人々」。58の児童は、男児と女児。二人とも長靴をはき、傘の骨が見えるから唐笠をさしているということか。女児はスカートのようだ。68では、数人が田の中で働いている。季節からは、田の草取りでもあろうか。作者は高等科の二年生。本人の勤労体験か。

風景画は、「62塀に囲まれ立木のある大きな家屋」、「65立木のある家屋」、「69立木のある家屋」の三作品。児童が、目にしている風景のスケッチだ。

静物画は、「59鉢植えの花」、「64リボンを巻いた帽子」、「66開いた本と閉じた本」、「67皿にのせた果物」、「71立てかけられたコウモリ傘」の五作品。66の開いた本には、文字も描かれた丁寧な作品。67の皿にのっている果物の種類までは判別



できない。

第三四半期の掲載状況は、七月十九日、二十二日、二十九日の三日間の掲載に、何れも募集していた「海と艦船」と軍人援護ポスターの入選作品が掲載され、読者からの投稿作品は九月一日から十三日の間に掲載された。八月には、「図画」の掲載はなかった。

第三四半期に複数の作品が掲載された児童はなかったが、在籍校では、山梨県穂積校が六人で六作品掲載された。内訳は、一年生二作品、二年生一作品、五年生一作品、高等科二年生二作品。

二作品が掲載されたのは、二校。愛知県名古屋市那古野校の二年生と四年生、岡山県岡山市南方校の三年生と四年生。この二校四名の作品は、「海と艦船」の入選作品。那古野校は、海軍大臣賞と二等入選。南方校は、文部大臣賞と通信大臣賞。七千三百四十三点応募への審査結果として二校四名が入選したわけであるが、優秀作が集中したことも事実。

#### 五 昭和十七年第四四半期における「図画」

昭和十七年第四四半期（十月～十二月）に掲載された「図画」は、次の二二作品。画題が付されている場合、「」で記した。検討のために、便宜的に、第三四半期を引き継いで、掲載日付順の番号を付す。

- 72 日の丸を立てた戦車（北海道長沼第四校四年男子、十月十八日・日、第一八八九号）
- 73 紙風船（一つ）（長野県平岡校五年女子、同右）
- 74 遠景に山、中景に家屋、近景に草花（山形県鎮秀校二年男子、十月二十三日・金、第一八九三号）
- 75 立木のある二棟（山形県相模校六年男子、同右）

- 76 日の丸をつけて飛行中の戦闘機二機（北海道小樽市稲穂校一年男子、同右）
- 77 校庭で遊ぶ子供たち（千葉県銚子市中央校二年男子、十月二十八日・水、一八九七号）
- 78 つげペン、インク壺、封筒、便箋（新潟県葛塚校六年男子、同右）
- 79 カボチャとジャガイモ（群馬県黒保根校四年男子、十月二十八日・水、一八九七号）
- 80 開いた本と閉じた本（山梨県穂積校高一女子、同右）
- 81 皇居二重橋前で最敬礼をする人々（東京市京橋区泰明校三年男子、十二月八日・火、第一九三二号）
- 82 「ハワイ海戦」爆撃され黒煙をあげている戦艦（東京市牛込区早稲田校五年男子、同右）
- 83 神社に参拝している姉弟（東京市京橋区泰明校五年男子、同右）
- 84 戦車と共に進軍する兵士たち（東京市牛込区早稲田校五年男子、十二月九日・水、第一九三三号）
- 85 教室にポスターを貼る児童たち（東京市京橋区泰明校三年男子、同右）
- 86 戦闘中の落下傘部隊の兵士（東京市向島区第二寺島校六年男子、十二月十三日・日、第一九三七号）
- 87 俵に詰める作業をしている人々（東京市京橋区泰明校五年女子、同右）
- 88 戦闘機に乗り込む飛行兵（東京市神田区神龍校六年女子、十二月二十日・日、第一九四三号）
- 89 離陸する戦闘機（東京市神田区神龍校六年女子、同右）
- 90 爆撃される戦艦（東京市王子区王子第四校六年男子、十二月二十五日・金、第一九四七号）
- 91 飛び立つ飛行機を帽子を振って見送る兵士たち（東京市神田区神龍校四年女子、同右）
- 92 航空母艦に駐機している戦闘機（東京市品川区東海校高二男子、同右）
- 93 爆撃する戦闘機（東京市王子区王子第四校六年男子、十二月二十七日・日、第一九四九号）

以上、第四四半期二二作品のうち、絵柄に「戦時下色」が描かれたのは、72、76、81、82、83、84、85、86、88、89、90、91、92、93の一四作品。掲載率は、六三・六％。第三四半期は四四％であったから、大幅な掲載率の上昇になった。

一四作品のうち、児童の自主的な投稿作品は、「72日の丸をたてた戦車」「76日の丸をつけて飛行中の戦闘機二機」「86戦闘中の落下傘部隊」の三作品。72、76の絵柄は児童の日常生活でも目にすることが可能であるが、この絵柄も新聞に掲載された写真でも目にするのが推測され、着想を推定することはできない。86の落下傘部隊についても、新聞での写真が想定されるが、ニュース映画もまた想定されようか。

十七年の第四四半期ゆえの作品は、「大東亜戦争一周年記念の作品」群である。十二月八日に81、82、83の三作品、九日に84、85の二作品が掲載された。

この五作品は、東京市京橋区泰明校から三作品、同市牛込区早稲田校から二作品が掲載されたが、「大東亜戦争一周年記念の作品」を募集する広告記事は紙面に見ることが出来ず、「大東亜戦争一周年記念」のための作品として両校に依頼されたものとも推測できる。

85では、児童が教室に「さあ二年目も勝ち抜かう」と「ほしがりません勝つまでは」のポスターを貼っている絵柄。この二つの標語は、大政翼賛会と朝日新聞、東京日日新聞、読売新聞が募集した「大東亜戦争一周年国民決意の標語」入選一〇作品のうちの二つ。この年十一月二十七日に発表された。ただ、絵柄では「さあ二年目も勝ち抜かう」となっていたが、情報局の『週報』（十七年十二月九日号、第三二二号）には「さあ二年目も勝ち抜くぞ」。

88から93までの六作品は、何れも、「少国民新聞」主催の「映画講堂の感激『ハワイ・マレー沖海戦』を見て」による絵柄。東宝映画『ハワイ・マレー沖海戦』（山本嘉次郎監督）は、この年（十七年）十二月三日に全国で封切られた。「海軍省の後援で全国の学生、軍需工場、婦人会などが動員され、占領地も含めると約一億人の人間がこの映画を観ており、日本映画史上、空前のヒット作となった」（講談社『昭和』第六卷、平成二・一）。

「少國民新聞」では、児童を自社の「映画講堂」に招待しての鑑賞会を開いており、掲載された児童も、招待された児童たちであったということであろう。

第四四半期に掲載された二二作品のうち、「戦時下色」を絵柄とする一四作品以外の八作品の絵柄は、静物画四作品、風景画二作品、人物画二作品。

静物画は、「73紙風船」、「78つけペン、インク壺、封筒、便箋」、「79カボチャとジャガイモ」、「80開いた本と閉じた本」。描く対象は様々であるが、学年進行に沿った、丁寧に描かれた作品である。

80の「開いた本と閉じた本」は、第三四半期「66開いた本と閉じた本」と同じ構図の作品であり、在籍校も山梨県穂積校。66が高等科二年生であり、80は高等科一年生と、学年が異なるが、「図画」の授業内容が同じであったことを推測させる作品。

風景画は、「74遠景に山、中景に家屋、近景に草花」、「75立木のある二棟」。両作品とも山形県の在籍校だが、前者が二年生、後者が六年生。同じ紙面の上下に配置され、学年の違いが分かっておもしろい。

人物画は、「77 校庭で遊ぶ子供たち」と「87 俵に詰める作業をしている人々」。77は、たくさんの児童が校庭で遊んでおり、休み時間のようだ。87は、俵に何かを詰めている大人たちと、詰め終わった俵を縄でくくっている大人、それをしゃがんでみている二人の児童が描かれている。さて、詰められているものは何であろうか。

第四四半期の掲載状況は、十月と十二月の掲載であり、十一月には掲載されていない。勿論、その事情は不明。また、児童の自主的な投稿作品の掲載は、十月に集中しており、十二月は「十二月八日」の一周年ということもあり、十二月に掲載された一三作品のうち、大東亜戦争一周年記念関係作品が五作品、十二月三日公開の「ハワイ・マレー沖海戦」の映画講堂関係が六作品掲載され、「少國民新聞」の企画が大半を占めたことになる。

第四四半期にも、複数の作品が掲載された児童はなかったが、在籍校では、東京市京橋区泰明校が四作品掲載された。

内訳は、三年生二作品、五年生二作品。

三作品が掲載されたのは、東京市神田区神龍校。内訳は、四年生一作品、六年生二作品。

二作品が掲載されたのは、二校。東京市牛込区早稲田校と東京市王子第四校。前者は五年生二作品、後者は六年生の二作品。

第四四半期で、複数の作品が掲載されたのは、何れも東京市の所在であり、「大東亜戦争一周年記念」の作品募集記事が見えないことから、泰明校と早稲田校への依頼ではなかったであろうか、と推測してみる。

また、「映画講堂」に関する作品は、招待した国民学校への「少國民新聞」からの依頼ではなかったであろうかと、推測している。

それぞれが「少國民新聞」からの依頼であったと推測する背景は、「大東亜戦争一周年記念」の作品募集となれば膨大な作品が集まってしまう恐れがあったのではなからうか。第三四半期、「軍人援護ポスター」の募集には、ほぼ一か月の募集期間に、「十五万七千九点」の応募があった。これほどの応募では審査の煩雑さは言うまでもないことだろう。

「日本映画史上、空前のヒット作」となる映画である「ハワイ・マレー沖海戦」を見てを内容とする作品についても、事情は、同様ではなかったであろうか。それならば、招待した国民学校へ依頼すれば、その煩雑な審査は免れるというものである。

### おわりに

「少國民新聞」の前身、「東日小学生新聞」の発行された昭和十二年から十七年における「図画」の「戦時下色」の絵柄は、次のようになる。

昭和十二年は、二五四作品中二二（約 八・六六％）  
昭和十三年は、三三〇作品中五六（約一六・九七％）  
昭和十四年は、二七八作品中一五（約 五・四〇％）  
昭和十五年は、二七九作品中一二（約 四・三〇％）  
昭和十六年は、三〇六作品中四五（約一四・七一％）  
昭和十七年は、 九三作品中六一（約六五・五九％）

十七年の「図画」は、掲載数が前年比で二二三減。昭和十二年以来、最小の掲載数となった。極端ともいえる減少であり、減少に至る背景については今後とも検討する。

一方、「戦時下色」の絵柄は、掲載数そのものが十二年以来で最も多く、掲載数比でも最大となり、約六六％を占めるに至った。

その背景には、「少國民新聞」の企画による掲載がある。第一四半期における皇軍慰問の大東亜戦争の自由画（二七作品）、第三四半期の「海と艦船」当選作品（六作品）と軍人援護ポスター入選作品（四作品）、第四四半期の大東亜戦争一周年記念作品（五作品）と「ハワイ・マレー沖海戦」を見ての作品（六作品）を合計すると四八作品になる。これは、戦時下色を絵柄とする作品六一の七八・六九％。

児童の自主的な投稿による作品に見られた「戦時下色」の絵柄は二三作品であり、「戦時下色」を絵柄とする作品六一の二一・三二％に過ぎない。

十七年における「戦時下色」の絵柄が十二年以来の最大数となった背景には、「少國民新聞」の企画が背景にあったこと

を裏付けている。

一方、前年の十六年では、「図画」の掲載数三〇六作品中四五が「戦時下色」を絵柄としたが、この四五作品のうち二八作品が「満蒙義勇軍の慰問作品」であり、児童が自発的に投稿した作品ではなく、「少國民新聞」による企画掲載であった。従って、自主的な投稿作品は、二七八作品であり、そのうち「戦時下色作品」は一七作品となり、掲載率は約六・一％となる。

この係数を一七年に当てはめてみると、「図画」の掲載数九三作品中六一が「戦時下色」を絵柄としたが、この六一作品のうち四八作品は児童が自発的に投稿した作品ではなく、「少國民新聞」による企画掲載であった。従って、自主的な投稿作品は、四五作品であり、そのうち「戦時下色」の絵柄の作品は二三作品となり、掲載率は約二八・八八％となる。

つまり、自主的な投稿作品では、十六年より実数では四作品の減少であったが、掲載率では約六％から約二九％へと大幅な増加率を示すことになったのであり、その理由は、前年の十二月八日に開戦した「大東亞戦争」の戦果がこの十七年に大々的に報道され、その戦果に児童の関心が強く向けられていったからであったと推測できよう。